

優秀賞

つけられたドア、消えた壁

流通経済大学付属柏高等学校 1年 星野 和子

「わー。惜しいーもつと手前だったね。」

初めて、聞く声が私を慰めてくれた。最後の一投を上手く投げられず、優勝を前に負けてしまった。

私は中学生のとき、特別支援学校の中学生と一緒に「ポッチャ」の試合をした。ポッチャとは、知的障害の方だけでなく、手足が不自由な人も道具を使って参加できる、皆が楽しめるパラリンピック・スポーツだ。

私が初めて特別支援学校の皆に会った時、心の中で心配と不安が渦巻いていた。なぜなら、ほとんどの子が上手に、言葉を使えなかったりコミュニケーションをとれなかったりしたからだ。私は皆と笑顔で会話できるのだろうか、不安とともに皆との間に壁を感じてしまった。

皆と上手に話すことができないまま迎えた、試合本番。均衡した試合で、私が勝利に王手をかける一投を放つと、今まで話したことのないメンバーが、「グッジョブ！」と親指を立て、手を差し出してくれた。また、ファインプレーをしたメンバーに私が手を差し出すと、笑顔で力強いハイタッチを返してくれた。予選を通過して進んだ決勝は、代表選までもつれ込んだ。私が代表として臨んだ延長戦。投げたボールは狙いはずれ、私たちの願いも届かぬまま、転がっていった。

「わー。惜しいーもつと手前だったね。」

これは、一度も話したことのないメンバーからかけてもらった言葉である。そして、落ち込んだ私に微笑みながらハイタッチをしてくれた。皆の心の温かさ、ハイタッチの幸せが、私に優しさで温かい気持ちを教えてくれた。私を感じていた壁に、チームの皆がドアをつけてくれた。壁にドアがつけば、それは壁ではなくなると、私は思う。こちらと向こう側をつなぐ新たなドアとなる。皆がドアの向こうから教えてくれたこと、次は、私が新しいドアの向こう側に教えられる人になりたい。